

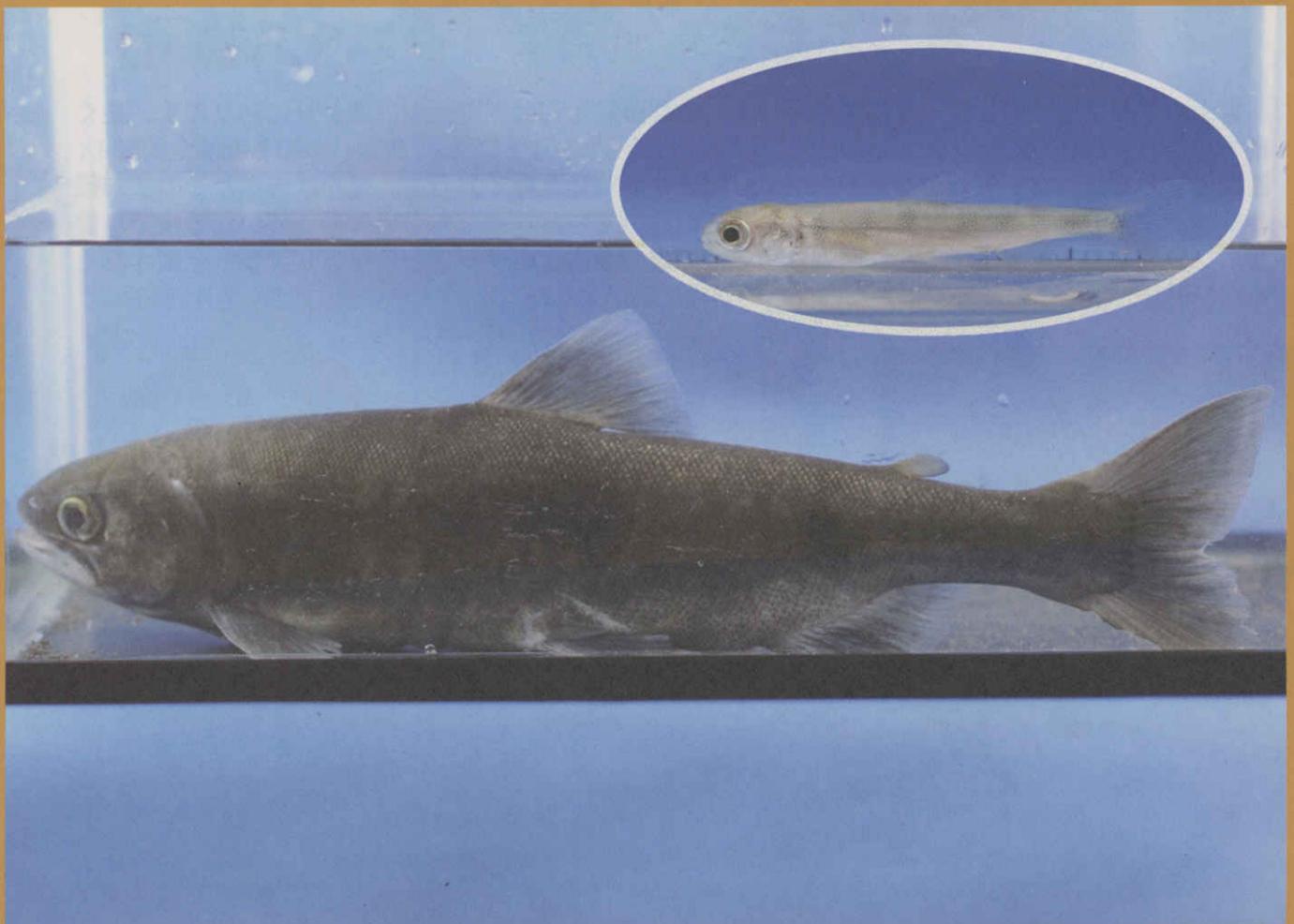


美しい富士山を子どもたちに残していくために

富士山クラブ通信

第42号

2012年 10月



写真提供 山梨県水産技術センター

富士山クラブ通信 第42号 目次

- ふじさん演芸会2012 クニマス物語・・・1～2 富士山の世界遺産「構成資産」めぐり・・・12
夏休み子どもキャンプ報告・・・・・・・・・・3～4 日米姉妹山交流/世界遺産知床訪問レポート・・・13
神田紫さんと行く富士登山・・・・・・・・・・5～6 事務局からのお知らせ・・・・・・・・・・14
ボランティア活動一覧(7～9月)・・・7～11

2012年9月22日
西湖・もりの学校



輝け！西湖 富士山クリーンアップ & ふじさん演芸会「クニマス物語」

富士山クラブもりの学校（本部事務所）は、山梨県富士河口湖町西湖のほとりにあります。長く絶滅したと思われていた「クニマス」が70年ぶりに西湖で発見され、「西湖」の知名度は全国区！。西湖のまわりは、富士五湖のなかでもあまり開発や商業化されておらず、豊かな自然がそのまま残る地域です。そしてわがもりの学校は、かつて地元の皆さんが子どもの頃に通っていた分校で、懐かしい雰囲気のある場所。そんな西湖ならではの魅力を富士山クラブから発信しようと企画されたイベントに、秋の1日、多くの人々がもりの学校に集いました。

報告 青木 直子



9月の定例クリーンアップ活動を「クニマス」にちなんで、西湖の湖畔で実施しました。富士河口湖高校の生徒から首都圏の大学生、そして団体会員の㈱オートバックスセブンの社員の皆さんから常連の会員の皆さままで、なんと153人の参加がありました。西湖は富士五湖の中でも、透明度が高く、湖面は穏やかで一見きれいにみえます。ところが、会員の皆さんの鋭い目線、「ごみセンサー」が働く、ガラス片やルアーなどの小さなごみから、ウインドサーフィンボードやドラム缶などの大きなごみまでどんなものでも見逃しません。ごみをそのままにしておく、行きつく先はクニマスやヒメマスが棲む湖底。お互いに声を掛け合い、熱心にクリーンアップ活動、集めたごみは190kgとなりました。

終了後は、地元・根場の皆さんが準備してくれたトン汁とお餅に舌鼓。賑やかな昼食となりました。

表紙の写真 クニマス

クニマスは、漢字では「國鱒」と書きます。かつて「キノシリマス」とも言われていました。秋田県田沢湖にしか生息していませんでしたが、昭和15年に強い酸性の玉川の水が田沢湖に引き入れられ、絶滅してしまいました。



クニマスの受精卵は、昭和の初めに、長野県、山梨県、富山県へと分譲され、山梨県では、昭和10年に西湖へと送られました。

2010年に西湖で生息が確認されたクニマスは、このときのお卵からかえった稚魚の子孫です。表紙のクニマスは西湖生まれ。西湖で捕獲され、その卵を採り人工ふ化させて育ったのが、パーマーク（背中の黒い点々）のある稚魚。パーマークは成魚になると消えてしまいます。目がキョロっとしていて、かわい。ヒメマスそっくり！山梨県では実験的に4℃、8℃、12℃のそれぞれの温度で稚魚を育てているそうです。クニマスの生息はまだ謎が多い。これからの調査研究が楽しみです。



ふじさん演芸会

午後はお待ちかね、ふじさん演芸会です。もりの学校の講堂に座布団、舞台の上には緋毛氈（ひもうせん）が敷かれ、出囃子が響きます。

最初の演目は、金近こうさんの三味線に、鏡味仙三さんの笛と太鼓による寄席囃子「富士山の四季の彩り 音楽紀行」です。三つの楽器の音色が、さまざまな風景を描き出します。三味線を伴奏に、会場の皆で「頭を雲の上に出し〜」と合唱もしました。

次は鏡味仙三さんによる太神楽「風林火山曲芸」。刀などの小物を巧みにあやつり、楽しい芸を披露していきます。武田信玄に扮した登場では、会場からヤンヤヤンヤの拍手。大きな傘の上で、升や「富士ちゃん」（ぬいぐるみ）をくるくると回したり、止めたりと自由自在。わあっと歓声があがりました。

さて、トリは神田紫さんの講談「奇跡の魚 クニマス物語」、講釈台にパンと張扇が響き、始まり始まり。クニマスの由来に纏わる田沢湖の「辰子姫」の物語、そしてクニマス絶滅に至る時代背景と人々の苦悩、戦後、絶滅したといわれても、「どこかで生きていてほしい」と思う情念。昔から今へとつながるクニマスへの人々の想いを熱く語って頂きました。

終了後は芸人の皆さんも加わって交流会を開催。地元ならではの新鮮な野菜やワインを楽しみながら、クニマスの話題で盛り上がりました。会場ではクニマスパネルを設置、もりの学校に今後も常設展示の予定です。

神田紫さんによる「奇跡の魚 クニマス物語」は11月中旬に開催される、毎日新聞主催の富士山ルネッサンスシンポジウム（東京・毎日ホール）の時間のなかで再演される予定です。

秋田県仙北市 田沢湖を訪ねて

「クニマスの故郷はどんなところだろう」と、イベント準備のための取材を兼ねて秋田県仙北市田沢湖を、スタッフの佐伯と一緒に訪ねました。東京から新幹線で2時間。田沢湖駅に隣接した観光案内所でさっそく情報収集。クニマスが「木の尻（きのしり）マス」と呼ばれるようになった「辰子伝説」を聞き、地図で見どころをチェック。

田沢湖は周囲20キロの瑠璃色の湖。深さは423m。かつて透明度は33m、クニマスのほかヒメマス、イワナ、サクラマス、アユ、ウグイ、ナマス、ウナギ、20種類以上の魚がいたといえます。昭和15年、電力供給と新田開発を目的に田沢湖を自然のダムとして活用しようとして、97℃の温泉が1分間に5千から1万5千リットル湧く、水量が豊富な玉川温泉から水が引かれます。酸性度がpHで1.2（塩酸）の水は「玉川毒水」といわれ、田沢湖にその水が流れ込むようになると魚は絶滅。現在は中和施設ができ、湖の表面ならpH5となりましたが、それでも田沢湖には酸性に強いウグイとコイが泳ぐだけ。それがクニマスの故郷の現状です。

田沢湖最後の漁師だった三浦久兵衛さんの息子である久さんには話を聞きました。田沢湖の水をもっと中和すべきことに加え

て、秋田県最大の水力発電所・生保内（おぼない）発電所が田沢湖から取水するために、水位が大きく上下していることが問題で、この大きな変動で湖畔の周りは景色が変わるほどに大きく崩れてしまっているといえます。

話を聞きながら、電力や農業用水と今の田沢湖が人々の暮らしを支えているのも事実、環境問題だけでなく、エネルギーや食糧問題まで、クニマスの里帰りには大きな課題があり、私たちはどのような将来を選択するのかを問われています。難しく悩む問題です。

里帰りの望みがないわけではありません。西湖と田沢湖が「姉妹湖」となったのが縁で、夏に仙北市から中学生らが富士山にやってきました。子どもたちの作文の中には、クニマスへの強い思いが感じられます。西湖と田沢湖の交流を通じて、何か新しい知恵や提案が生まれたり、大人になった子どもたちが最先端の技術を開発し、環境改善が進むかもしれません。クニマス生存のニュースは、日本の自然環境を改めて考えるきっかけとなっていると思います。今回の取材では、地元の方をはじめ三浦久さんに貴重なお話をうかがい、また仙北市農林部総合産業研究所農山村体験デザイン室の泉谷衆さん、田口聡美さんには示唆に富むご意見を頂きました。心より感謝申し上げます。（青木）